

市史講座第7回ミニレポート

10月20日(土)第7回の講座が開かれました。

第1部：「出雲神話の神々と松江」(講師:島根県古代出雲歴史博物館専門学芸員 森田喜久男 先生)



森田先生は、東出雲町に「黄泉つひら坂」と称する場所があり「死者の国への入り口」とされているが、果たしてそうなのかという点についてお話しされました。

「ヨモツヒラサカ」という言葉は『古事記』の神話に2回登場し、1回目はイザナキとイザナミが決別する場面で、2回目はオオアナムチがスサノヲの試練をパスしてオオクニヌシとなる場面であるが、いずれも「ヨモツヒラサカ」から黄泉国や根の国に「入って行った」のではなく、黄泉国や根の国から「出て行く時に越えた」のが「ヨモツヒラサカ」であることをお話しされました。

そして、スサノヲがオオアナムチをオオヌニヌシと認めたのは根の国と葦原中国との境にある「ヨモツヒラサカ」を「越えた」段階であることから、「ヨモツヒラサカ」とは単なる境ではなく、

「越える」ことで新たなパワーを身につけることができる「希望への出口」と理解すべきだとまとめられました。

第2部：「戦前松江の医療と福祉」(講師:佐賀大学准教授 鬼嶋 淳 先生)



鬼嶋先生は、戦時期の保健衛生をめぐる全国的な動向や国の施策、および島根県の保健衛生の状況を踏まえた上で、昭和15年に設立される島根県社会保健婦養成所の設立とその実態について説明されました。

島根県では昭和15年の松江高等女学校での結核集団感染事件に見られるように、県民の保健衛生状況の改善が課題でした。そうした中、県学務部長・加藤精三の構想と推進のもと、全国に先駆けて保健婦(保健師)の養成機関たる島根県社会保健婦養成所が設立されました。そこでは高等女学校卒業生をその主な担い手と見据え、また、長期にわたる修業期間を設定し、授業料を徴収しないなど、保健婦養成に当時の島根県が相当に力を入れていたという特徴

が見られました。

次に、鬼嶋先生は地域での保健衛生事業を担った保健婦が自らいかに考え、いかに活動していったかについて、手記や聞き取りなどをもとに説明されました。それについて、黎明期の保健婦たちは、当初はおぼろげなイメージしかなかった自らの仕事について、日々の修業や地域での活動の中で、自らの保健婦像について自覚的に模索しはじめたこと。そして、地域においては、当時一般的に理解の低かった保健衛生事業や保健婦の仕事を積極的にアピールするなど、戦時下の社会にあって保健婦として自ら考え自ら活動していったということを述べられました。

そして、鬼嶋先生は、講演の中で用いた保健婦たちの「記録」を例にあげ、人々の日々のなにげない記録や、また写真や伝承(聞き取り)といった文字以外の資料も、地域で暮らす人々の生活の様子を明らかにする上で貴重な歴史資料になると述べられました。